

大地の哲学

東京・早稲田で十一月に「東方教会・ロシア正教会の靈性をめぐって」という講演会があった。プロテスタントの組織である日本クリスチャンアカデミー関東活動センターが、他の宗教や宗派を勉強するために開いている連続講座だ。会場には、牧師や信徒、それにカトリックの哲学者や修道女も含めて約三十人が集まった。

講師を務めた慶應義塾大学倫理学科の谷寿美教授はまず、モスクワの南約三百キロにあるオプチナ修道院について語った。ドストエフスキの小説『カラマーゾフの兄弟』に登場するゾシマ長老のモデルとなった院長が住んでいた僧堂である。文豪トルストイも

南	善
無	財

菅原伸郎

訪ねた聖地だったが、ソ連時代は閉鎖され、荒れ果てていた。最近になって修復されたそうで、再評価されているらしい。回覧された写真では、金色の十字架が真新しい鐘楼の上に輝いている。

どこまでも続く大地のなかで、十九世紀のロシアには西ヨーロッパとはひと味違った思想が育った。谷さんは多くの宗教者や芸術家を紹介したが、とくに、ウラジーミル・ソロヴィヨフ

(一八五三―一九〇〇)について時間を割いた。ドストエフスキに影響を与えた哲学者であり、やはり『カラマーゾフの兄弟』の作中人物、アリオシヤのモデルになったともいわれる。

その哲学は、合理的知性とは正反対の「ソフィア(叡智)」を大切にし、神を「全一性」の中でとらえていた、という。プロテスタントよりはカトリック、とくにエックハルトらの中世神秘主義に近いようで、日本人には仏教を通して考えたほうが親しみやすいかもしれない。副題が「東西のはざまに位置するその思想風土から」という講演が終わわり、質疑応答に移ると、会場では一即多、多即一、不二、般若、成仏、神化、聖霊、あるいは西田哲学の「場」といった言葉も飛び交った。

ドストエフスキの小説を思い浮か

べて、激しく、極端で、狂気に近い世界と考えるかもしれない。しかし、谷さんは「ロシアの宗教性にあつては、聖と俗といった両極が分離されないのです」と説明した。ロシア正教を背景にした宗教思想は深く、難しいが、谷さんの著書『ソロヴィヨフの哲学』（理想社）によると、この哲学者は「彼岸と此岸とは、区別されつつも一つなのであり、そこにこそ王道（あるいは中道）の生き方が見えてくる」と説いたそうだ。

「区別されつつも一つである」とはどんなことなのか。これもさらに分かりにくい、浄土思想なら、往相と還相の相即不二といったことだろうか。唯識学にも詳しい谷教授が、ソロヴィヨフに関して「中道」などという仏教用語を何度も使っていることは興味深

かった。

講演の中では、パーヴェル・フロレンスキー（一八八二—一九三七）という、異能の修道司祭のことも紹介された。その「真理の柱とその礎」という作品には、森の庵でうたったこんな詩も載っている。

小さな墓よ 私の小さい墓、永遠の
住み家よ

黄色の砂は、私の寝台で

石たちは、私の隣り人

虫たちは、友であり

湿潤の大地は、私の母

母なる汝、我母よ、とわの安息に私

を受け入れて下さい

主は 慈悲のお方である

（谷寿美訳）

この詩を聞いて、私はどこかに似た人がいたなあ、と思った。たとえば五合庵に住んだ良寛さんであり、アッシジの聖フランチェスコや、米国のウォールデン湖畔に住んだヘンリー・ソローにも通じるだろう。ともかく、キリスト教と仏教と背景は違っている、東西に共通する靈性がたしかにあることを実感できた講演会だった。

（すがわらのおお／ジャーナリスト）

